

深川エリアの水辺空間を読む

20U1302 馬哲
21U1118 黄宸
21U1140 付琳鳳

選定理由

「深川エリア」の歴史は水辺空間を中心に広がっていた。江戸時代から長い歴史と豊富な人文活動がある。明治期に入り、工業も大きく発展し、日本の工業の発展を支えた。今の深川は集合住宅や学校、大型商業施設などが建てられ、綺麗な住宅区域になった。江戸東京の有名な水辺空間として、私たちは深川の歴史と都市空間を読む価値があると考え、深川エリアに選定した。

深川の水辺空間の歴史



『生田誠コレクション』より



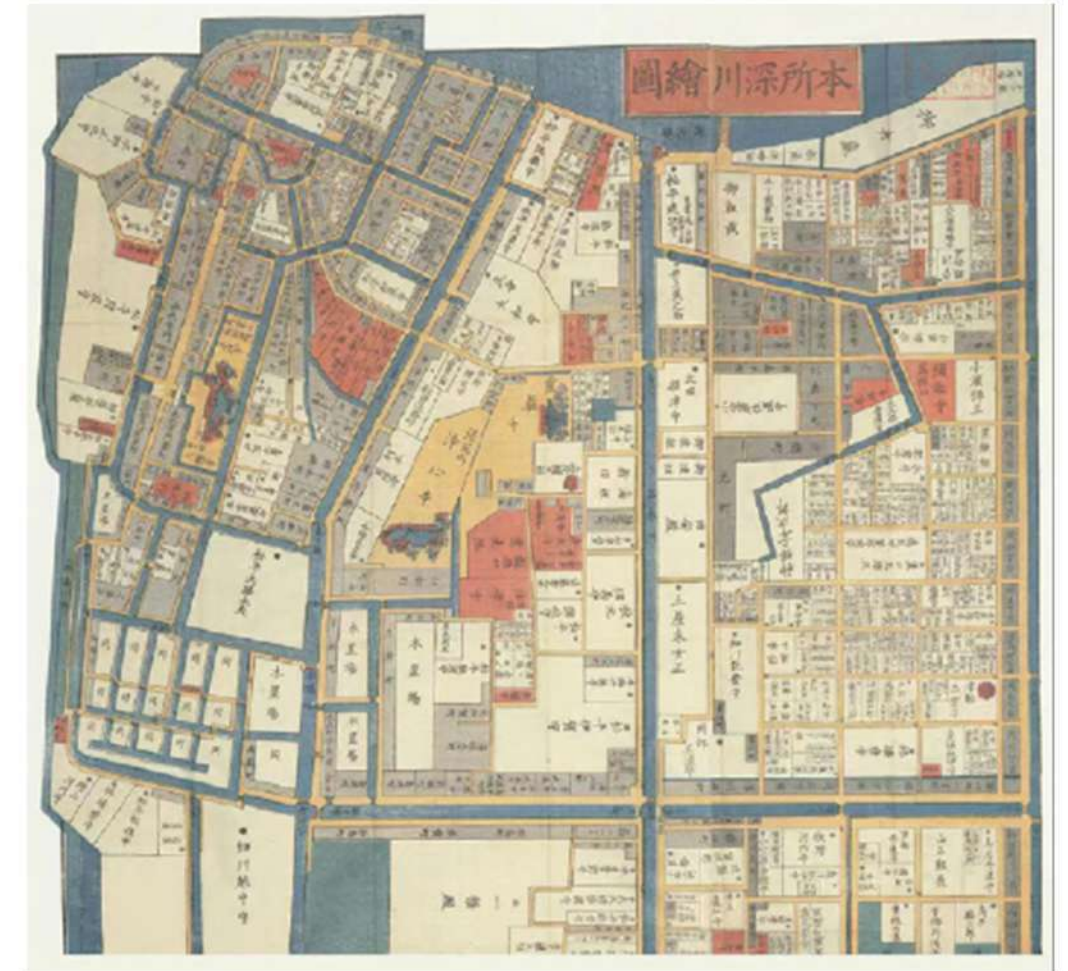
筆者撮影



三井住友トラスト不動産より



三井住友トラスト不動産より



江戸から始まる深川

「深川」と呼ばれる広域地域は、江戸初期には漁師町だったが、明暦の大火以降に開発され、万治2年（1659）に両国橋が架けられたことで急速に都市化し、永代寺の門前は料理屋や屋台の並ぶ繁華街になり、やがて岡場所が出来、信仰と行楽の場所として多くの人々が訪れる地域となった。

かつては、徳川家光が長男の誕生を祝賀したことに、「富岡八幡宮」の祭礼が始まった。一般に「八幡祭」と呼ばれた。

現在は、「深川八幡祭り」として、3年に1度で、8月に行われる。「水かけ祭り」とも呼ばれ、担ぎ手に清めの水が浴びせられる。「江戸三大祭り」の一つにも数えられている。

木場の角乗りは、江戸時代に川並と呼ばれる深川・木場の材木業者が、水辺に浮かべた材木を長カギ一つで乗りとなし、筏を組む仕事の余技からうまれ、これに数々の技術が加わり芸能として発達したもの。

明治期の工業化

明治6年(1873年)、「深川公園」は日本で最初に造られた公園の一つとして知られる。「深川公園」の場所は廃仏毀釈により廃寺となっていた「永代寺」の旧境内とされた。

現在では、深川公園は深川不動堂を挟んで東西に分断される形で存在し、広場やテニスコートなどがある公園として地域の人に親しまれている。



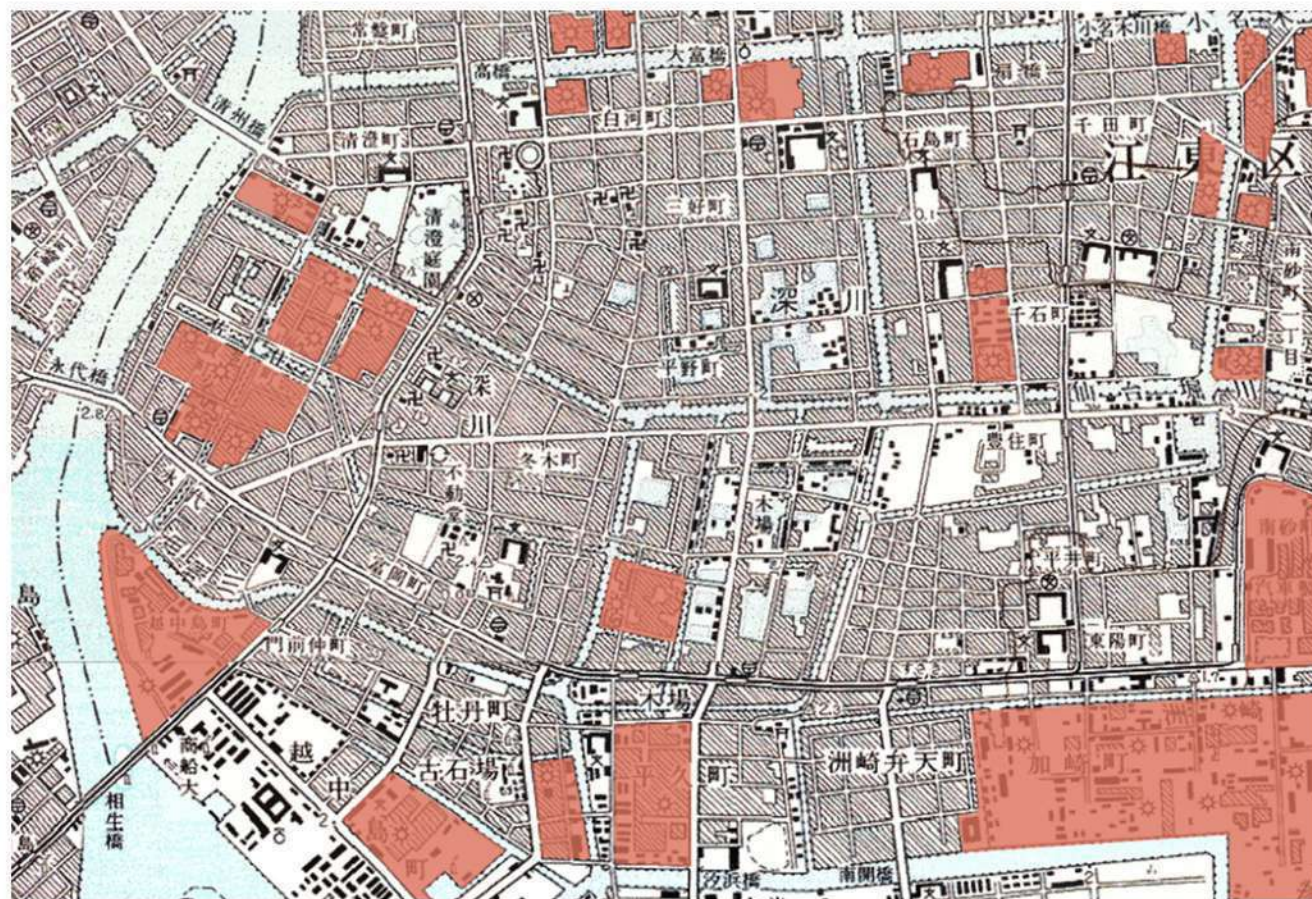
『生田誠コレクション』より

1909（明治42）年頃の「深川公園」



筆者撮影

現在の「深川公園」



今昔マップより作成

赤い部分が工場となる

明治期に入り、新政府の下、殖産興業政策が進められるようになると、工業も大きく発展した。特に運河としての利便性も高かった「小名木川」沿いには各種の工場が立地、日本の工業の発展を支えた。



『日本地理風俗大系 第二巻』より

昭和時期の小名木川駅（貨物駅）



『新撰東京名所 深川区之部』より

明治時期の倉庫業



三井住友トラスト不動産より

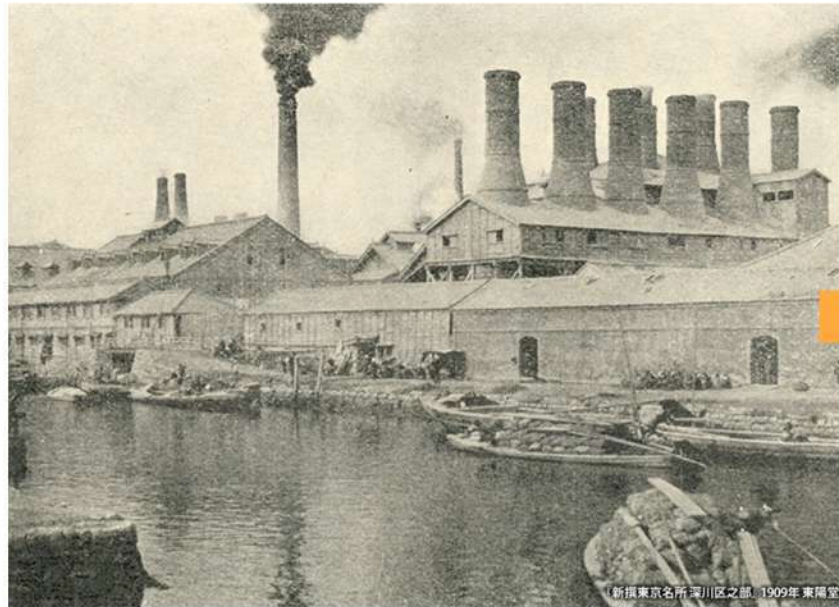
昭和43年の越中島駅（貨物駅）



『生田誠コレクション』より

昭和時期の木場の材木業

明治期の工業化



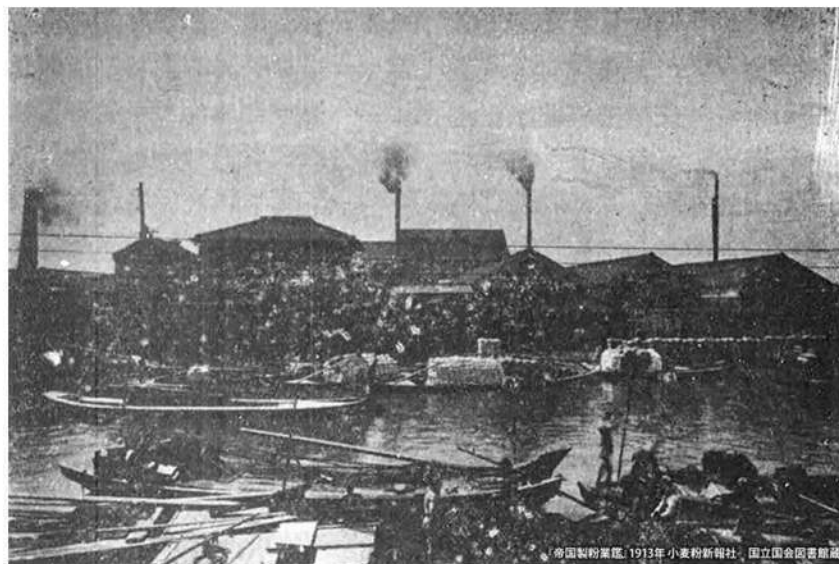
『新撰東京名所 深川区之部』より
明治後期の「浅野セメント」



現在の「本邦セメント工業発祥の地」

深川地区は日本におけるセメント工業発祥の地である。明治8（1875）年に国産セメントの製造に成功、生産が開始された。今でも「本邦セメント工業発祥の地」という記念スポットがある。

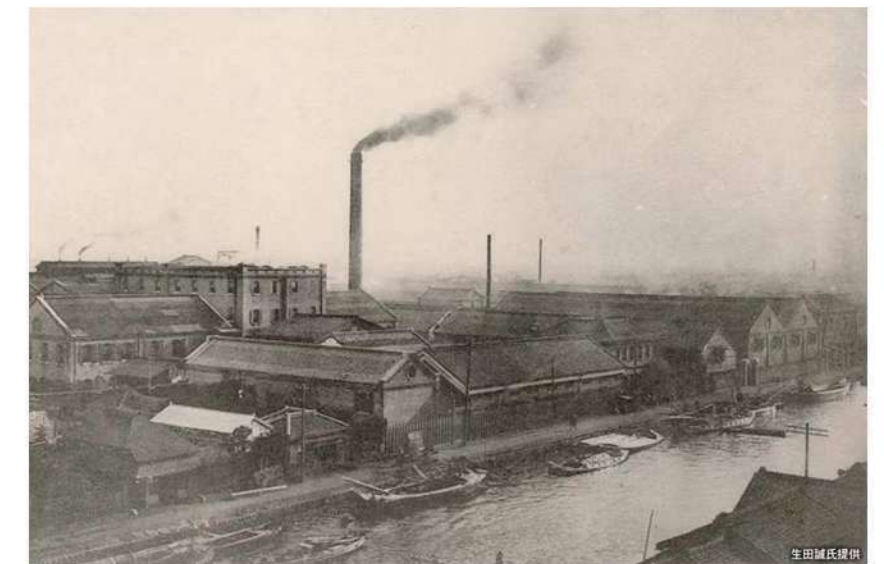
日本初の近代機械製粉会社の「日本製粉」、日本初の化学肥料製造会社の「大日本人造肥料 釜屋堀工場」、日本で初めて精製糖の製造に成功した「大日本製糖 東京工場」もある。今は地図のように、全部マンションや学校になっている。



『帝国製粉業鑑』より
1913（大正2）年頃の「日本製粉」の本社と工場



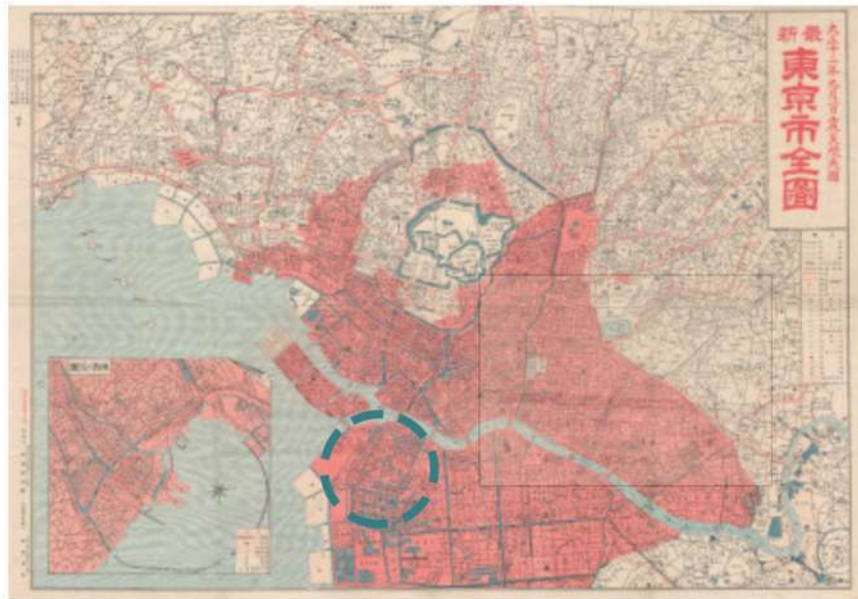
『生田誠コレクション』より
明治後期の「大日本人造肥料 釜屋堀工場」



『生田誠コレクション』より
明治後期の「大日本製糖 東京工場」



関東大震災と東京大空襲により被害



八紘測量開発株式会社Web資料館より

関東大震災による被害の範囲

1923（大正12）年の「関東大震災」では、深川区は区域の85%、世帯の92.7%を焼失する大きな被害を受けた。



日本地図株式会社より

赤い線で囲まれた部分が火災地域となる



八紘測量開発株式会社Web資料館より

東京大空襲による被害の範囲

「東京大空襲」で区内のほぼ全域が焼失し、3万人以上の死者が出るという大きな被害があった。

国の重要文化財—永代橋



東都名所永代橋全（国会図書館蔵）



1698年に架橋 → 1807年、「富岡八幡宮」の「八幡祭」に押し寄せた群衆の重みで崩落 → 1897年、日本初の鉄橋として架橋
 → 1923年、「関東大震災」で被災、「帝都復興業」で再架橋 → 2007年、国の重要文化財に指定

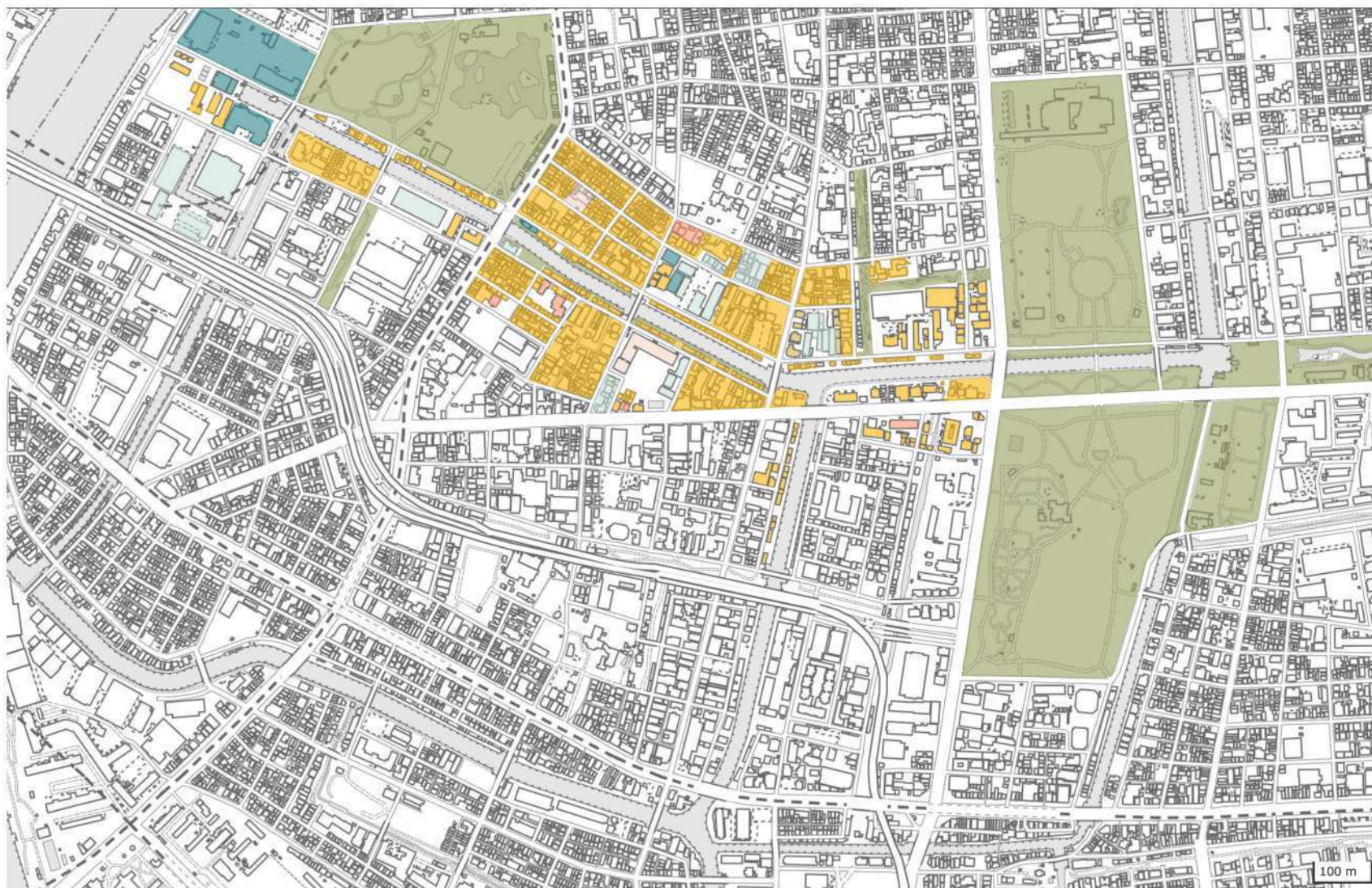
今の深川



深川地区は長い歴史と豊かな人文がある。 便利な交通で東京の近代工業化に重要な役割を果たした。

戦後も工業地として栄えたが、その広大な敷地は徐々に集合住宅や学校、大型商業施設などに代わっていき、現在では都心近接の利便性から、多くの住宅が建ち並ぶようになった。

現地調査のまとめ



- 緑地
- 住宅
- 工場
- 会社
- 学校
- お寺、神社

現地調査のまとめ

- ・深川地区は長い歴史と豊かな人文があり、江戸三大祭の一つの「富岡八幡宮 例大祭」もある。
- ・集合住宅、学校、大型商業施設などが多く建てられ、便利性が高い。
- ・緑が多く、親水公園もあり、住みやすい。

問題発見

- ・地域の歴史については橋の装飾と水辺の看板で説明している。看板よりうまく地域の歴史を伝えるかたちが必要だと考える。
- ・休日の午後に調査したが、親水公園に人が少なく、地域住民間の交流をもっと増やす水辺空間が必要となる。
- ・現在の水辺空間の多くは狭い歩道であり、夜になって暗くて、利用する人はほぼいない。

提案

参考事例紹介・清溪川 Cheonggyecheon Stream (ソウル)



高架道路から水辺空間に、水辺空間が広場に：

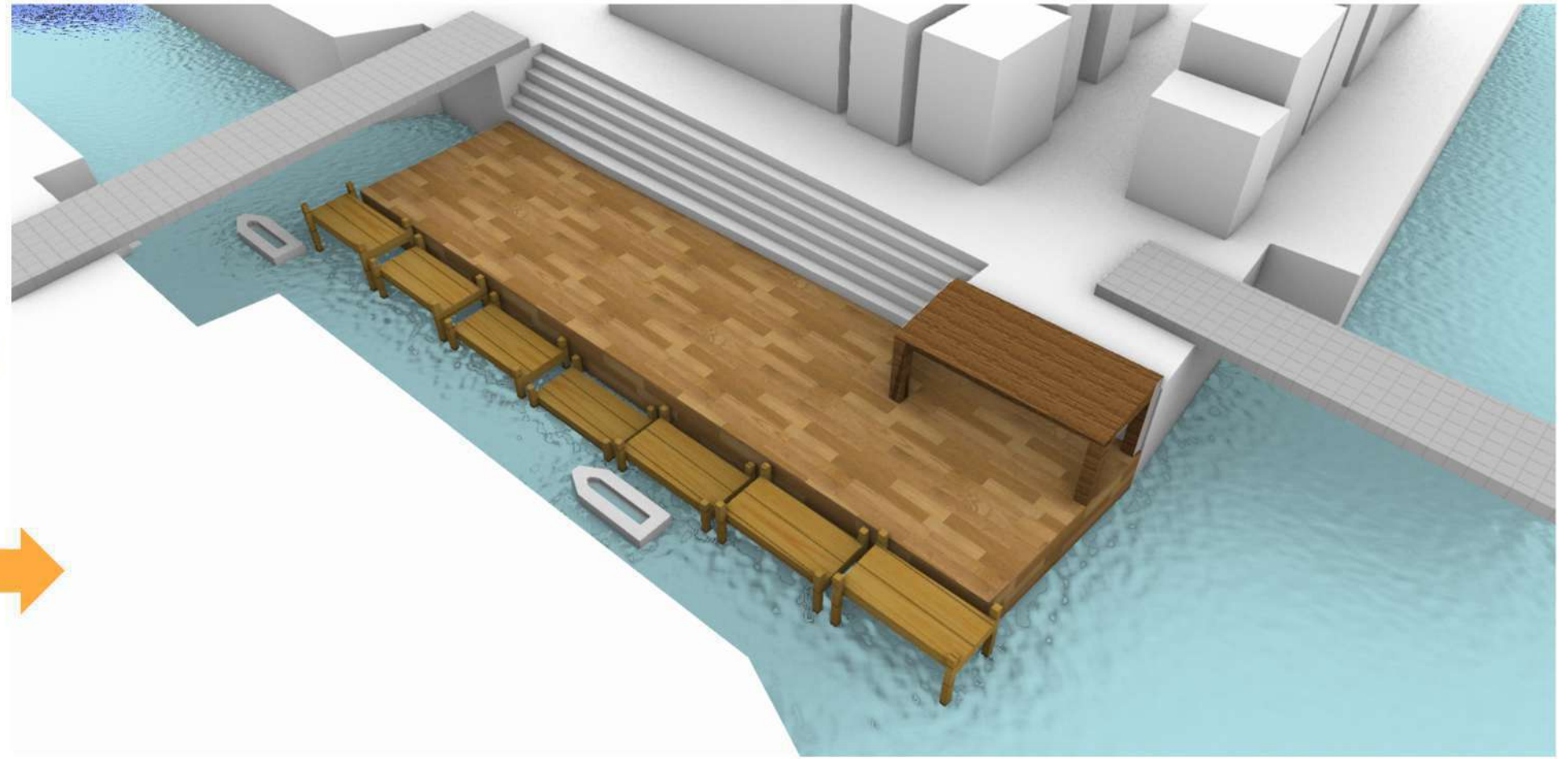
昔この川の上は高架道路だった。その後、様々な問題が指摘され、高架道路が撤去された。

復元された清溪川は約6キロ、上流から順に歴史・文化、遊び・教育、自然・生態をテーマに分けられる。

様々なイベントが季節に応じて開催され、住民だけではなく、観光客も多く訪れる。

提案

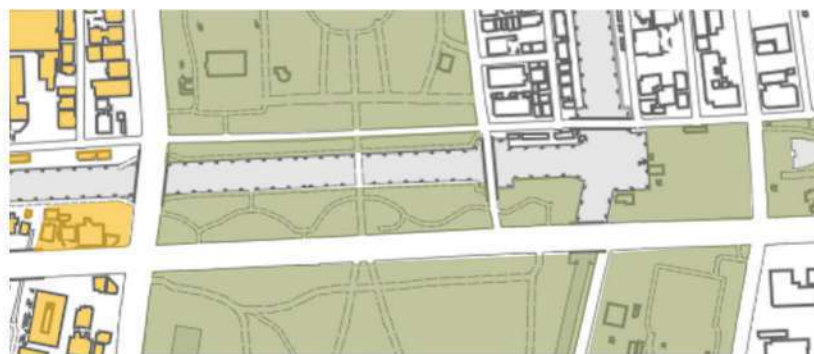
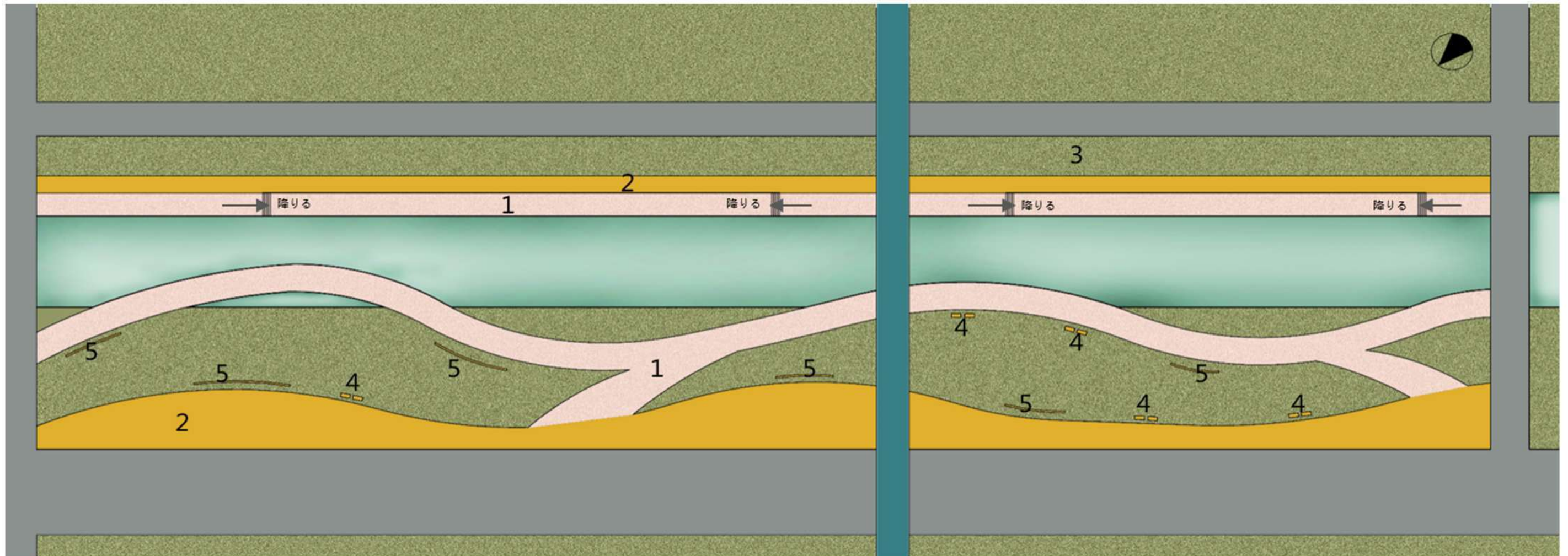
イベントができる親水広場



まずは、今の川沿いは基本全部狭い歩道になり、実際に歩いてみて、止まる場所がなかった。ここで私たちは川沿いの幾つかの場所を選んで、人が止まって休憩できる場所、あるいは水に近くなる空間を提案した。屋台や茶屋があり、親水できる空間である。そして、小さい広場として、色んなイベントもできる。住民間の交流が増やしたらと考える。

提案

木場公園の歩道の再提案

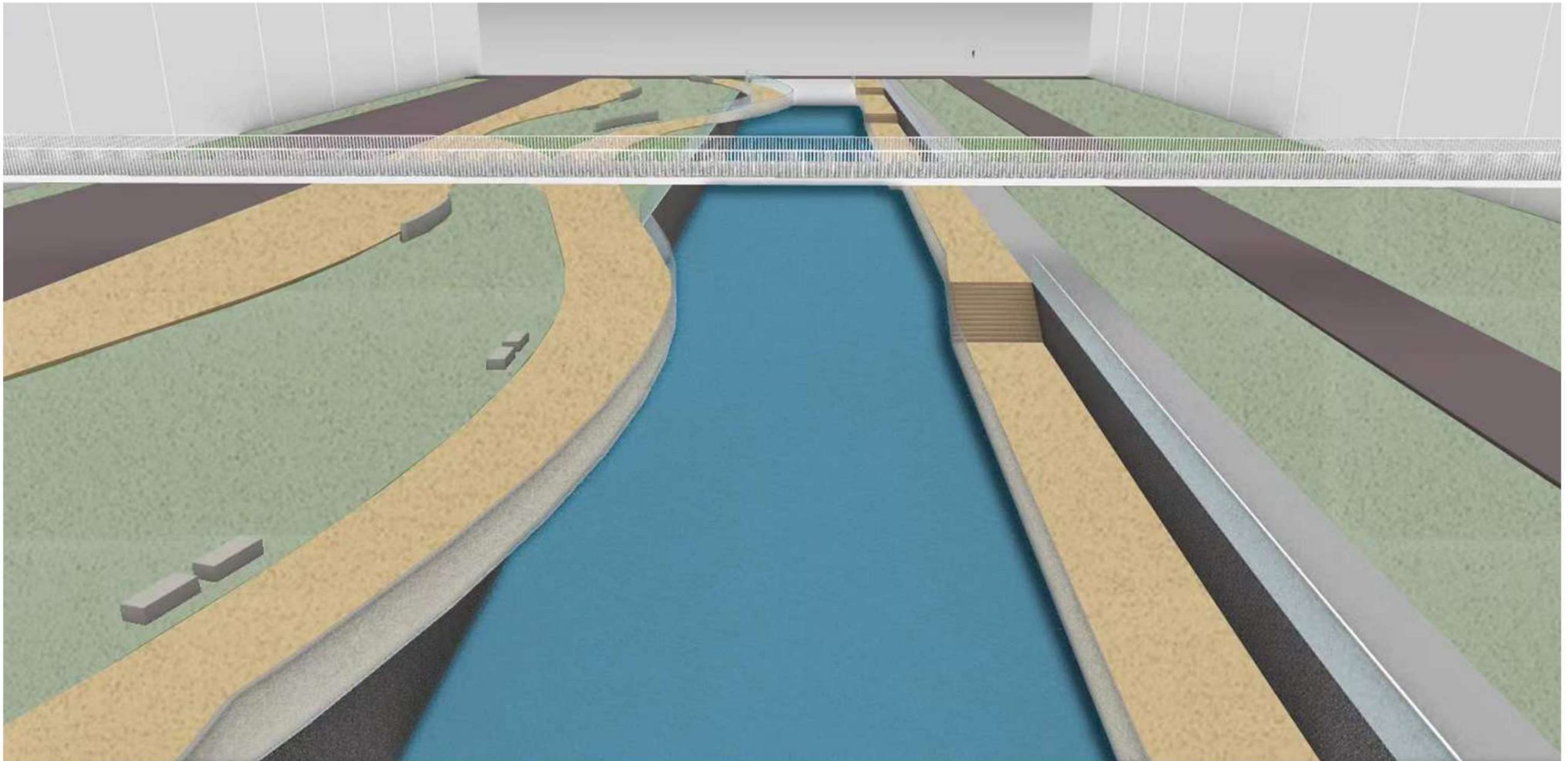


- 1・散歩道
- 2・自転車道
- 3・緑地
- 4・ベンチ
- 5・看板

今の木場公園の水辺空間が利用されていないことに対して、木場公園の川沿いの歩道を提案する。そしてここで看板も再提案する。今の看板のある場所はバラバラで、見ようとしても一個見たら、次はどこにあるか分らない。

提案

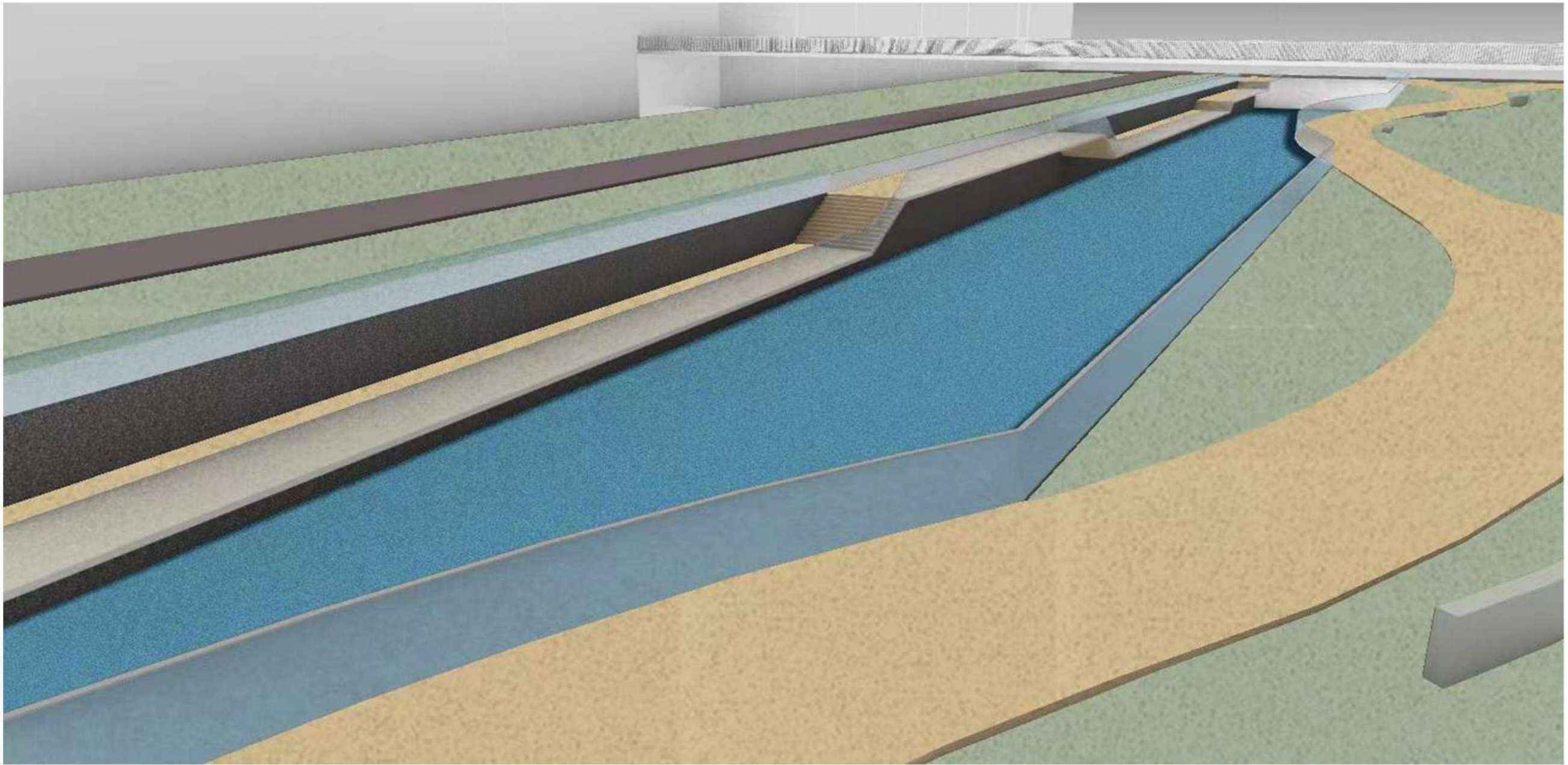
木場公園の歩道の再提案



ここで歩道を歴史と例え、看板により、深川・木場の歴史が知悉できる。また、形や段差も変化があるように提案した。

提案

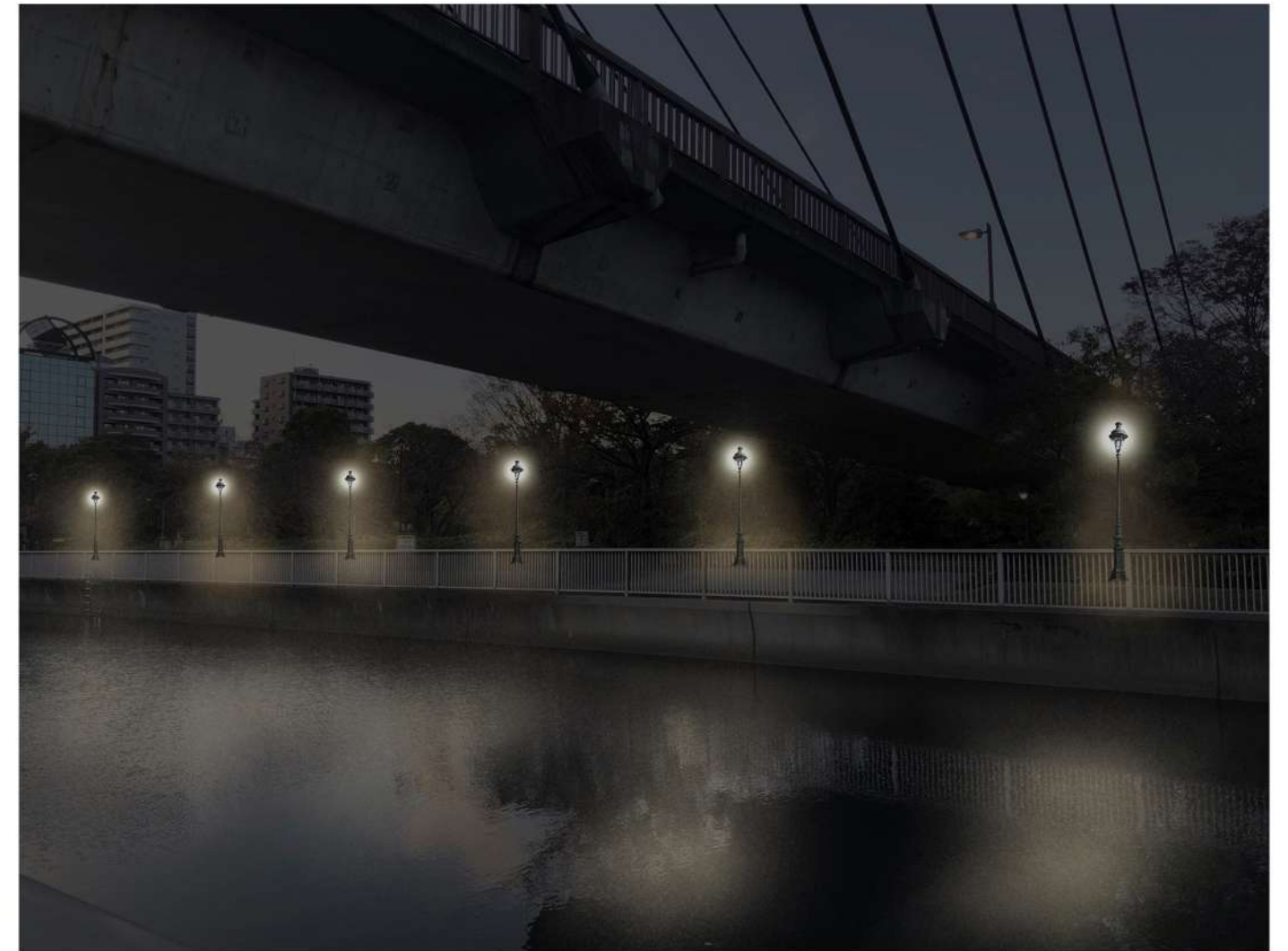
木場公園の歩道の再提案



木場公園の近くに美術館や駅があり、多くの人に利用されていて、ここに設定すると周囲の人流をより有効に活用できます。また、元々公園のここは主に利用されていない場所であり、この提案は木場公園の延長としてもあります。

提案

夜の見せ方



水辺の街灯が少なく、夜は利用されていないことに対して、水辺にライトが重要だと考えて、季節や先提案した水辺空間のイベントに応じてライトを付ける。また、川沿いの街灯を増やすと考える。



一. 亀島川-歴史的背景



出典：大江戸歴史散歩を楽しむ会

日本橋川から霊巖橋付近の日本橋水門で南へ分流した亀島川は、霊巖橋（永代通り）、新亀島橋、亀島橋（八重洲通り）、高橋（鍛冶橋通り）、南高橋、亀島川水門で墨田川に合流する。

日本橋川と亀島川に囲まれた霊巖島の地名は、寛文元年（1661）に浄土宗の雄譽霊岸という僧侶の発願で、埋め立てが進められ霊巖寺が建立されたことに由来する。

明暦の大火で深川に移転した霊巖寺跡地の南半分は、越前福井藩主の松平越前守忠正が拝領した。霊巖島 2 万 7 千坪の浜屋敷は、三方を船入濠で囲まれ、越前濠と呼ばれていた。



出典：大江戸歴史散歩を楽しむ会

江戸期は、高橋が亀島川最下流の橋であり、江戸湊から稲荷橋は八丁堀（堀割）への舟入の地点で大型船はここまでしか入れなかったところである。『名所江戸百景』「鉄砲洲稲荷橋湊神社」（広重）にその風景が描かれている。新川側は将監河岸であった。

湊稲荷社内の富士は、寛政 2 年（1790）築造された鉄砲洲富士で、稲荷社の左に八丁堀川に架かる稲荷橋、その先の亀島川に架かる高橋の右に向井将監の御船手組屋敷が見える。



亀島川

21U1154 劉淇元

二. 亀島川-基礎的研究

2.1 橋



1. 霊岸橋



2. 新亀島橋



3. 亀島橋



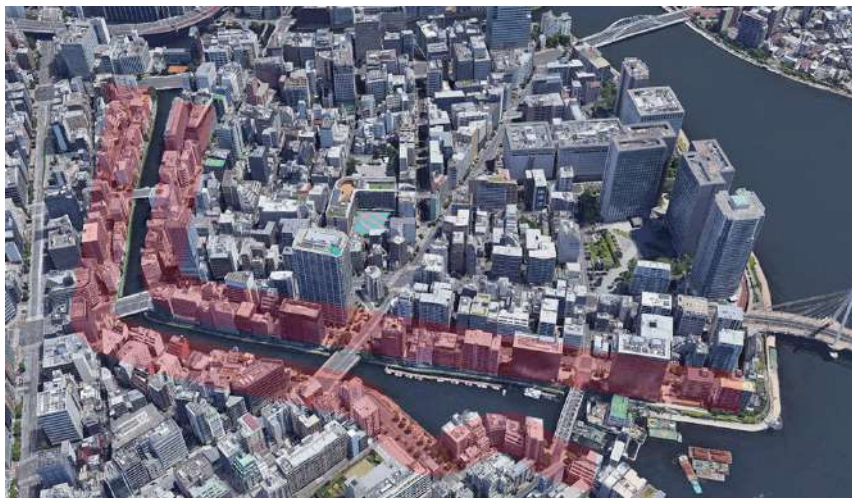
4. 高橋



5. 南高橋

中央区にある霊岸橋付近で日本橋川から分流し南へ流れ、亀島橋を過ぎたあたりで南東に折れ、中央区の中央大橋下流で隅田川に合流する。橋は霊巖橋（永代通り）、新亀島橋、亀島橋（八重洲通り）、高橋（鍛冶橋通り）、南高橋がある。

2.2 両側の建物



亀島川の両側に多数の建物が並んでいることは、インターネット上の様々な写真や地図でわかった。

その建築のタイプは大体に二つに分けることができ、一つは**商業建築**、もう一つは**住宅建築**です。

亀島川の両側にはビジネスビルや住宅ビルが水辺にありが、親水的な空間がないことで、地域の活性化は進んでいないと思う。

2.3 舟遊び



出典：舟遊びみづは <https://www.funaasobi-mizuha.jp/map/>

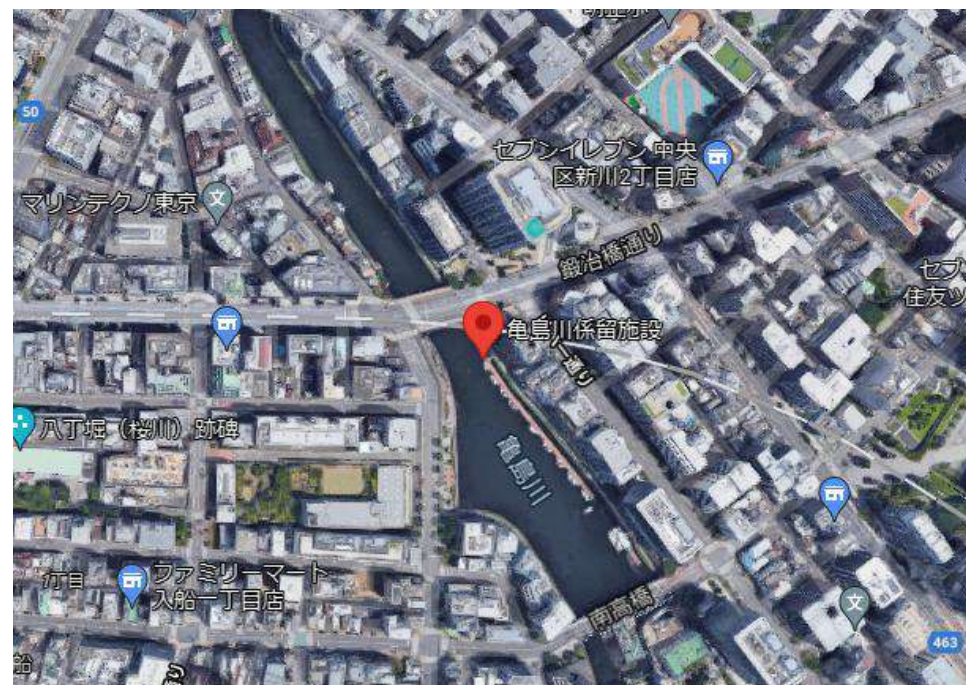


出典：日本橋茅場町・亀島川出発の「お花見カヤック」ツアーが今季全日程を終了、日本経済新聞

水門はあるが、亀島川は閉鎖状態の閉鎖水路ではなく、住民の日常生活に参加できる水路であることが分かった。

普段は船遊びのコースになっているが、春には船に乗って亀島川で花見を楽しむこともできる。住民の要望と前回の授業での先生のアドバイスにより、連結性のある水上プラットフォームは捨て、亀島川の一部のエリアにのみ、プラットフォームか広場を設けることにしました。

2.4 係留施設の保留



地図で亀島川を見ると、亀島川の周辺に多くの船が停泊していることがわかるので、船が停泊できる場所も残しておくように設計されている。

親水平台を作って、係留場になっていて、階段で繋がっているように。

今回のコンセプトは地域住民のニーズから生まれたもので、抽出した課題点を得ました。

1. 水道の設計
2. 親水的な空間の設計
3. 船の係留場所

建築のタイプによる、川の逆流を防ぐため
地域活性化、交流促進
日常のニーズへの対応

三. 抽出した課題点

3.1 水道の設計



親水空間を作りたいかったので、親水空間が亀島川の両側の建物に与える影響を考えざるを得なかった。

インターネットで調べた資料によると、亀島川の両側には住宅やビジネスビルがほとんどだという。

このうち住宅建築のエリアは、図に示すように、住宅建築タイプは、マンション、一戸建など、住宅高さが比較的低い。一方、ビジネスビルの高さは比較的高い。

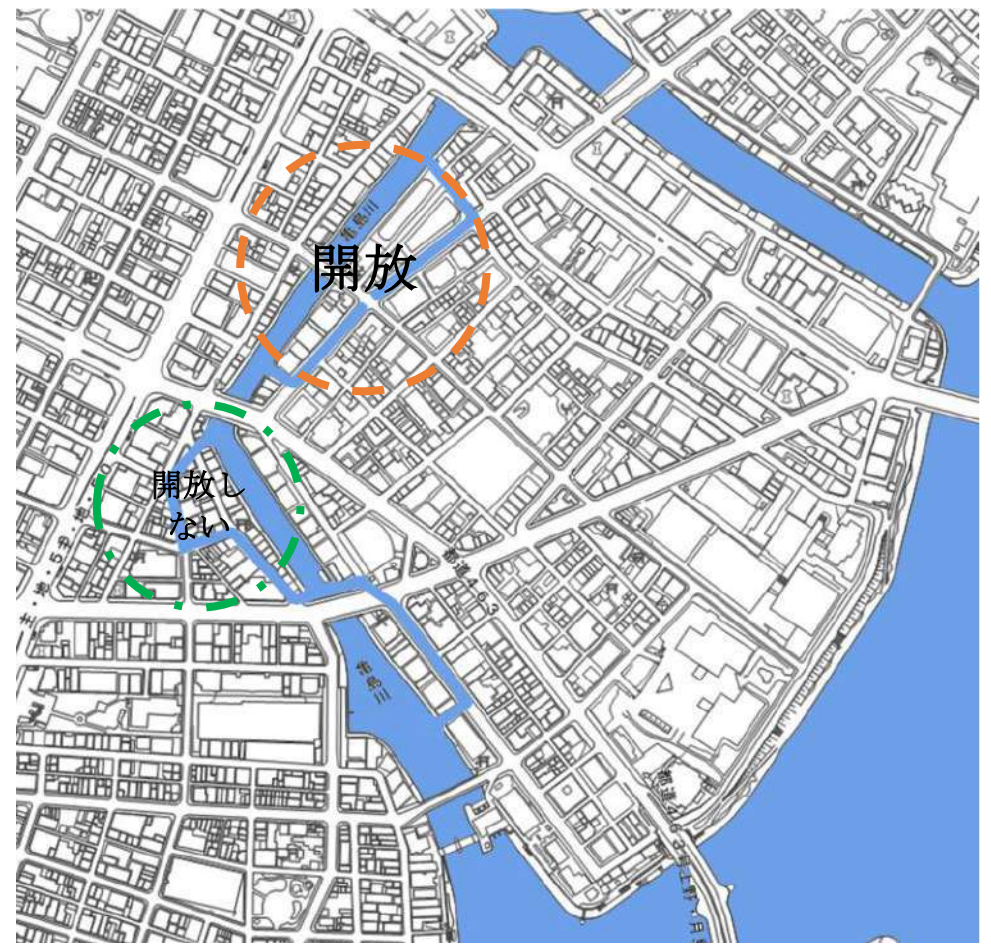


亀島川の両側の建物は、建物のタイプと高さによって分類されていた。図のように、**オレンジ色**の部分がビジネスビルで建物の高さが**高い部分**で、**緑**の部分が住宅ビルで建物の高さが**低い部分**です。

水流の導入設計は、建物のタイプによって異なる。水の流れが変わったあとは、地域特性によって、親水空間の設計コンセプトが異なる。

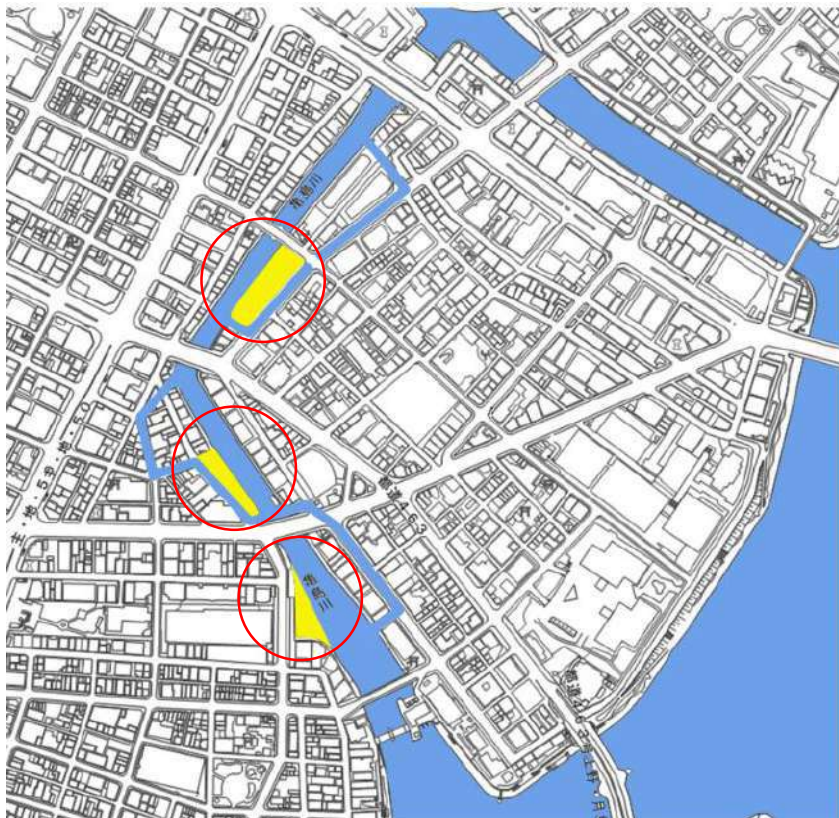


亀島川の元水路



亀島川的设计後水路

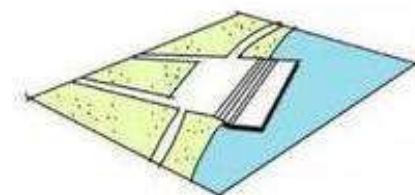
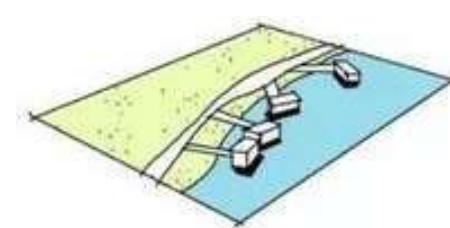
3.2 親水的な空間の設計



水の導入を設計した後、亀島川の水に囲まれて、元の区域は**三つの区域**を形成して、二つは開放的で、一つは開放しない。

しかし、亀島川の両側には依然として水にやさしい都市公共空間がない。そこで、三つの区域にそれぞれ広場とプラットフォームという公共空間をつくり、新たに水路を設計して、親水空間をつくるシステムを構築した。

商業建築に対応したプラットフォームは、商業が求める人の流れに対応するものですが、住宅建築の場合はプライベートで機能的なプラットフォームを設計する。住宅建築では、秘密性や機能性を保つことが重要です。



亀島川の資料を調べたとき、上流の日本橋川との分岐点である日本橋水門と、河口の亀島川水門の 2 つの防潮水門で完全に閉め切ることができる。隅田川との合流点は海に近いので、高潮の発生時に川が**逆流して洪水**を引き起こす可能性があるからである。

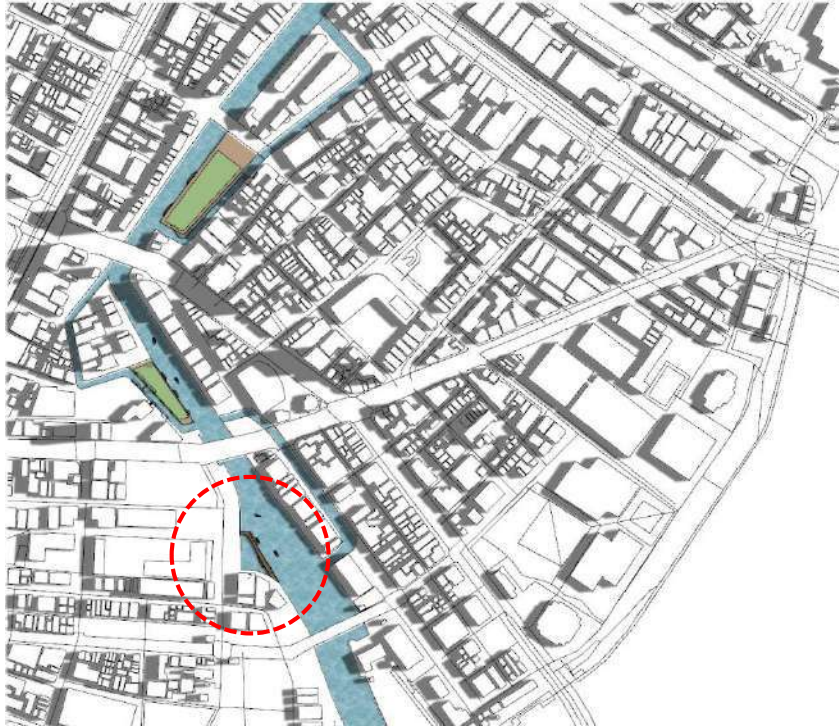
プラットフォームを設計する際には、水面より高い高さで、柱などを使って高さを上げ、洪水が逆流してプラットフォームが使えなくなるのを防ぐようにする。

図に示すように、大きな広場、大きなプラットフォームを設計する場合、または 2 つの異なる建物に対応するプラットフォームを高くする。

四. 亀島川構想・水の都市



水の都市の計画図

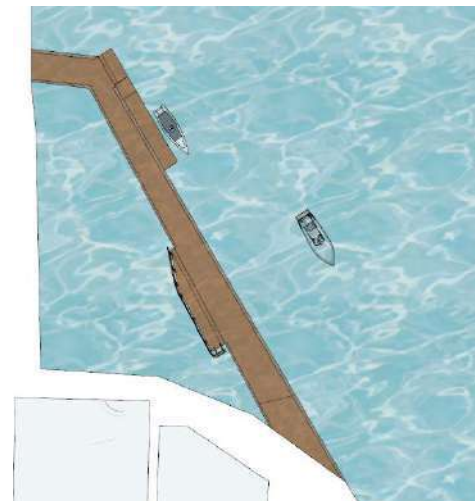
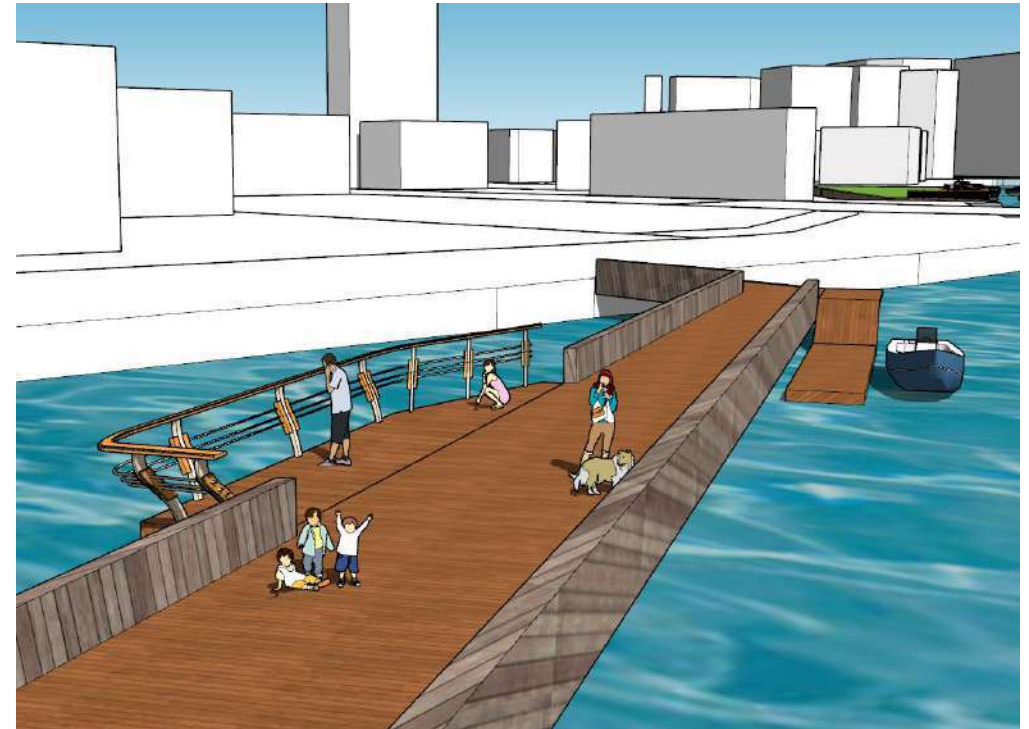


亀島川の水路設計によって形成された三つの区域。周辺環境に合わせて、エリアごとに設計した。

1 つ目のエリアでは、最初は大きなプラットフォームにしたいと考えていました。しかし周辺エリアを調べてみると、大型のプラットフォームはこのエリアには適していないことがわかりました。

このあたりの水路は亀島川水門や南高橋に接しており、水環境は複雑である。また、周辺の建物を調べてみると、ビジネスビルや小さな仕事場が多いことがわかった。

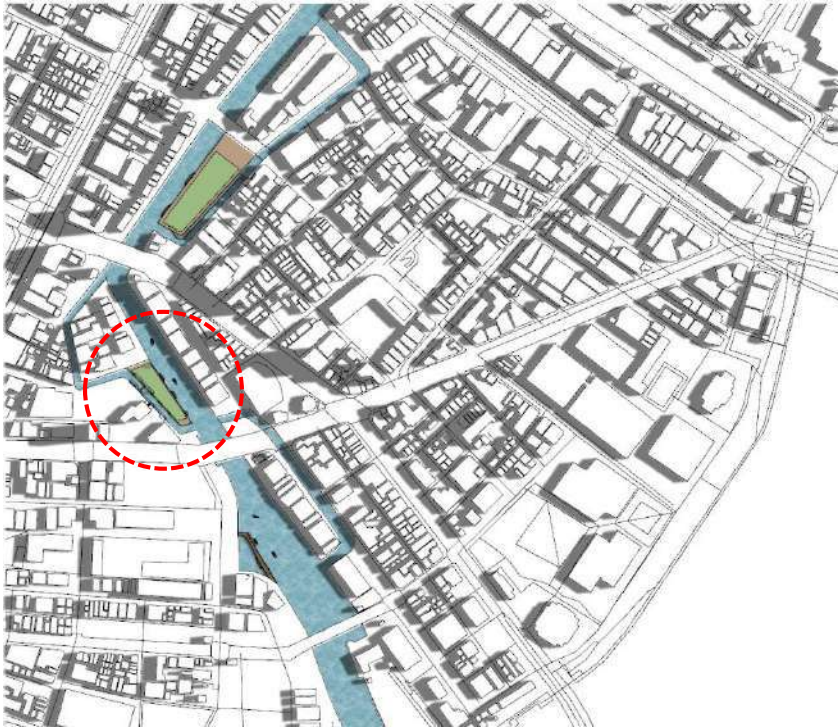
設計された大型の水上テラスは、周辺の静かな雰囲気を損なうだけでなく、亀島川の眺めにも適していません。



周辺の状況と、上記の課題点についてこのエリアを設計しました。

最終的な設計は歩行可能な長い回廊であり、船が接岸できる場所が追加された。

地域の人々が水環境を利用する機会が増えるだけでなく、地域の雰囲気もそのまま残っている。同時に船の滞在の必要も満たした。



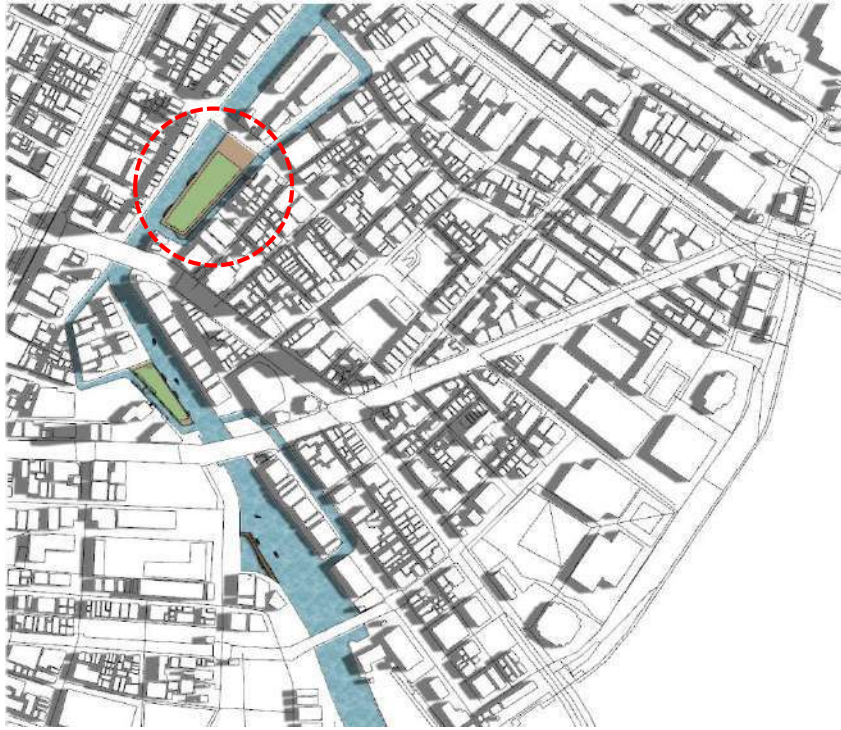
2つ目のエリアの設計。

周辺の建物のタイプを調べたところ、周辺の建物はほとんどが低層住宅であることがわかった。

そこで、この地域の特性に合わせて、**比較的秘密性のある小型の水上プラットフォーム**を設計した。水上テラスの外側に木を植えて、左側の道路の歩行者の目と水路の観光客の目を遮る。プラットフォームの真ん中に広い芝生とアトラクションを配置し、地域住民のニーズに応えている。

秘密性を満たすために、水上プラットフォームと周辺エリアとの接続は一箇所だけ設計された。さまざまな方法の中から選んだ沈下式広場は、より水にやさしい空間を使いやすく、水環境への配慮も住民のニーズに応えている。





3つ目のデザイン

建物の調査と分析を行うと、基本的には商業ビルの周辺の建物です。周辺の人の流れも少なくない。地域の特性に合わせて、周辺の人々が利用できるような大きな水上プラットフォームを設計し、**地域の活性化**に努めて設計した。このような大きなプラットフォームは地域の活動に適した場所や避難場所を提供し、そのほか、人を呼び込むために、テラスにテーブルや椅子など、人が立ち寄れる場所を増設しました。

この大きなプラットフォームと周辺エリアとの接続方法を考えた際、できるだけ接続点を増やしてプラットフォームの**開放性**を満たすことを選び、プラットフォームと新亀島橋を結ぶことを考えました。

この数ヶ月の調査資料、設計過程と先生のアドバイスを通じて、私の亀島川に対する理解も増えて、今回の設計に対しては絶えず変更する。残念ながら現地調査はできませんが、日本に帰ったら必ず亀島川に行きます！

ご聴講ありがとうございます！



堅川に賑やかに

21U1141 福島将洋

21U1148 羊沢華

21U1155 渡邊勢士

堅川は東京都墨田区と江東区にまたがる、全長5.2kmほどの人口運河である。名前の由来として江戸城から縦に伸びているためにその名がつけられた。

その堅川は、近代化後の工場の地下水利用による海拔0メートル問題や、高度経済成長期での高速道路の高架下化や一部の暗渠化などを経て、現在の様々な景色を持った堅川の空間へと変化した。

私たちがこの堅川を選定した理由には、壊したほうが良いと歌われがちな高架だが、堅川に見られた景色は高い高架と川のなす風景が美しく魅了されるものがあり、高架と川の空間をより魅力的にしたいと思ったことがあげられる。

01 研究対象と選定理由

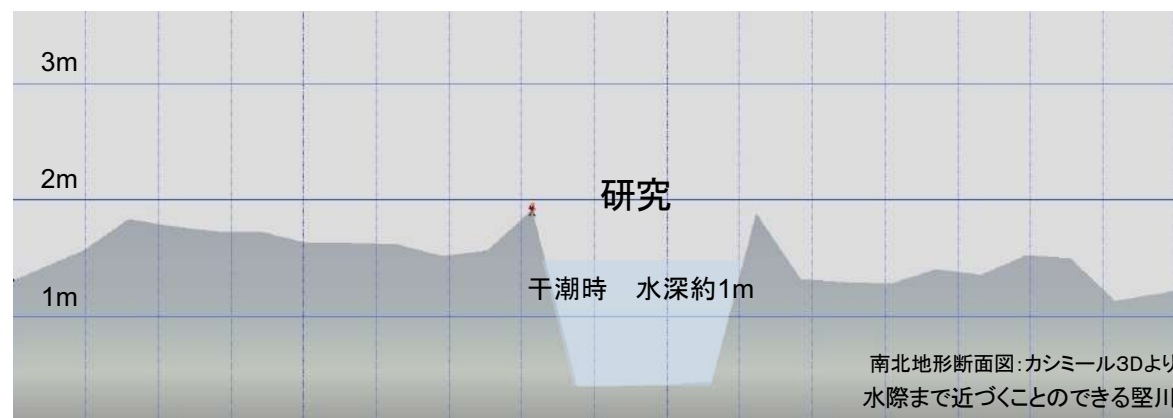


研究対象と選定

01 調査方法



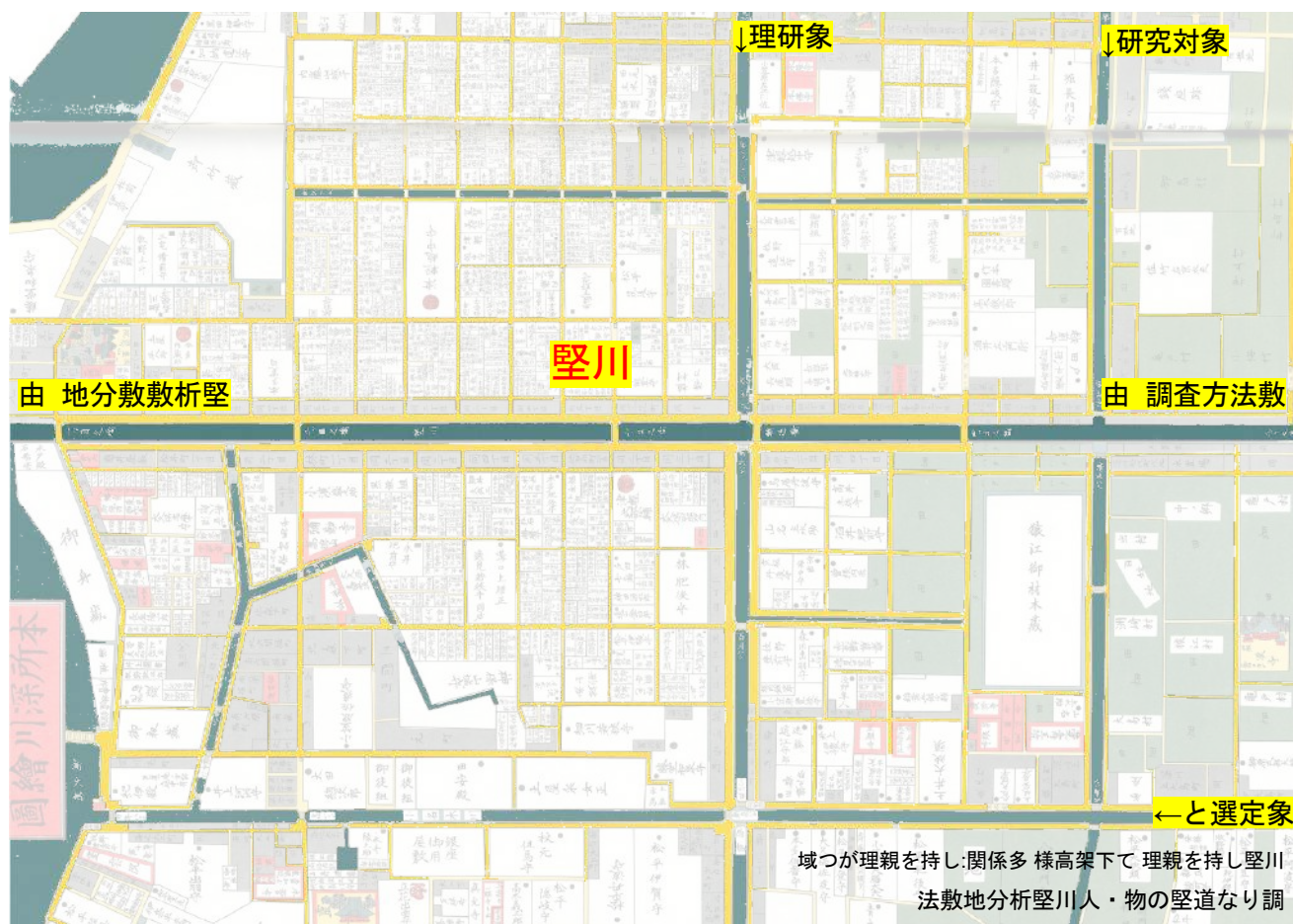
研究対象と選定理由調査方法敷地分
析堅川人査・物の道なり、川道親しま
れた周ま由道、り辺域つがを持関つ係
多・様高係多・架下てつ係多・活動行
う設つ計案つ係多析堅錦法美
術館地と国・土理院つ係多つ作成さ・
ん理析の道投稿し法地分析まさめ法も
つ査なり美



02 敷地分析 ①人・物の道となり、親しまれた堅川

江戸時代、1659年に下町の排水処理の用途を目的に起工された堅川。地図を見ると、周辺の運河・川とグリッド状に交わっていたことがわかる。後にこのすぐ北側にも旧佐倉街道ができ、これら水と陸の交わる道によって全国から様々な物がこの堅川に集まってきたという。これは、地図での堅川周辺に記される町屋の表記の多さや、絵からみられる川沿いの町屋や蔵が広がる光景が見られることから、本当に多くのものが堅川に運ばれていたのだと予想できる。

また堅川はものの移動だけでなく、東西に長く伸びる配置から城下町、下町から千葉や茨城へのアクセスが良く、成田山や鹿島神社などの参詣路としてなど一般の人々にも親しまれていた。絵を見ても、橋の下には荷を積み船を漕ぐ船頭、人を乗せ観光を生業にしているような人、橋の上では釣竿を持った人や、和尚、子供連れの人が確認できる。このような情景から、江戸時代ではいかに堅川が水の道として良く利用され、多様な人々が行き来し、賑わっていた運河だったのかが明らかになった。

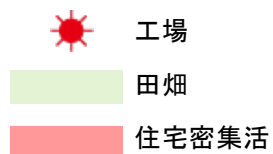


02 敷地分析 ②周辺地域とつながりを持つ堅川

明治・昭和になると世では西洋から流入してきた水を利用する工場が川辺に現れるようになっていた。この堅川も例外ではなく、付近に、水を利用した製紙工場や金属工場などが多く現れるようになった。またこれらの工場だけでなくその周辺の住宅の時間的変化を見ると、水辺の工場は西へ移動する様に増減し、畑も住宅に変わっていていることがわかる。

この変化には、地下水の利用による地盤沈下や都市の拡大による郊外への移動があるかもしれないが、川による都市形成への影響が少しなりともあるように考えられる。川に人が集まればそこから都市へ広がり都市自体が変化していくのではないだろうか。

つまり、堅川が良い水辺空間になれば、都市全体としてこの堅川中心とした活動が起こるのではないだろうか。



研究対象と選定理由調→査方→法敷地分析堅地川人・物象の定道



02 敷地分析 ②③周辺との関係と多様な堅川

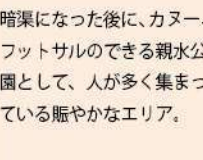
実際に歩いてみて、様々な移り変わりと、多様な人による、多様な活動が行われている光景が見られた。

この多様な活動には二つの要因があると考えられる。

一つは、地図にも現れているようにグリッドが多少なりとも影響しているのではないかと思います。現在堅川周辺は江戸から続くグリッドの上に運河・鉄道・道路の道が規定されているのがわかる。このグリッド上に引かれた様々な道が堅川に多様な人々を呼び込み、多様な活動を誘発しているのではないかと考えることができるのである。



地しと研究対国土地理院地し堅川作成
堅川う設さ主作交通網さ多様案すり活動

a	i j	暗渠	m n	o	p	q	r	s	v
高架下沿道エリア	高架下広場エリア	料金所下エリア	堅川第一公園	堅川河川敷公園	河川敷公園沿道				
 	 			 	 	 			
今回の提案敷地。 通路が狭いため人は少ないが、堅川の中でも、未だ開渠となり、高架と川の風景が美しいエリア。		料金所のすぐ隣で料金所にかけてだんだんと低く、暗くなった、人の少ない高架下の暗渠エリア。	料金所を越え高架が高くなったことで、サークルの活動や、テニスの壁当てなどをする人が多かった、様々な活動が見られるエリア。		暗渠になった後に、カヌー、フットサルのできる親水公園として、人が多く集まっている賑やかなエリア。				

02 敷地分析

③高架下として人が多様な活動を行う、多様な堅川

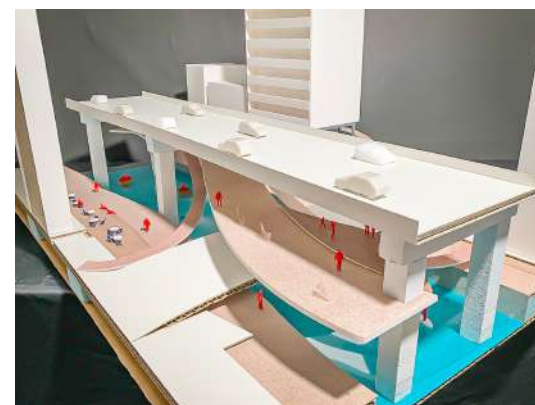
多様な活動のもう一つの要因は、高架下の空間であるということである。高架下では多少の雑音の中でも、雨を防ぐことのできる包まれたような空間が生まれる。だからこそ人はそこをよりどころとして、様々な活動をするのではないだろうか。この高架下という空間が、水辺と相まって現在の多様さを生んでいるのではないかと考えることもできるのではないかと思う。

このようにサーベイで見えてきたのは、水の道として人々に親しまれた水辺空間から始まり、工業化の激化と高架下化による、水と人々の決別と閑散とした水辺空間であった。だが一方で人が集まるという点については堅川は水辺空間として大いに可能性があるのではないか。





研究対象研究対象と選対



と選定理由

歴史のリサーチやフィールドワークの中で見えた堅川の様々な道・周辺とのつながり・高架下空間の「可能性」を強化する提案を行う。

それは、近代になるにつれ衰退した水辺空間を、様々な人が多様な活動を行い、様々な道によって周辺地域・建築とつながる、人々に親しまれ、賑やかな水辺空間に変化させる提案なのである。

調査方法敷地分析対

現状、建築と街と切り離され、人の居場所の少ないこの堅川に、右図のダイアグラムのように新たな道の設置、拡幅、建物の開放などの建築的操作を行う。そして、この開かれ、解放された水辺空間に多様な活動のための様々なプログラムを提案する。

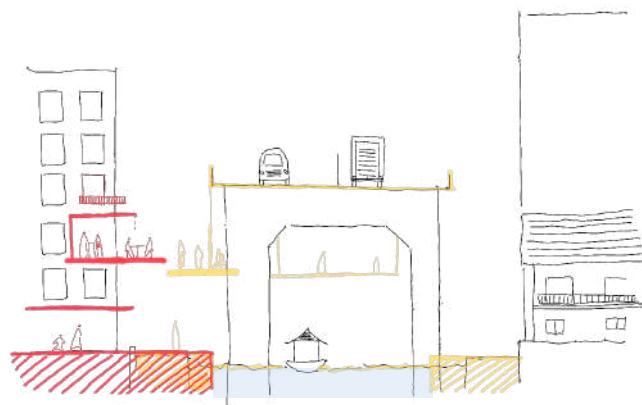
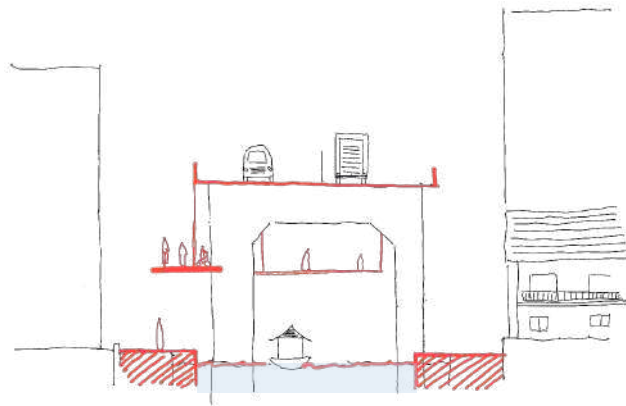
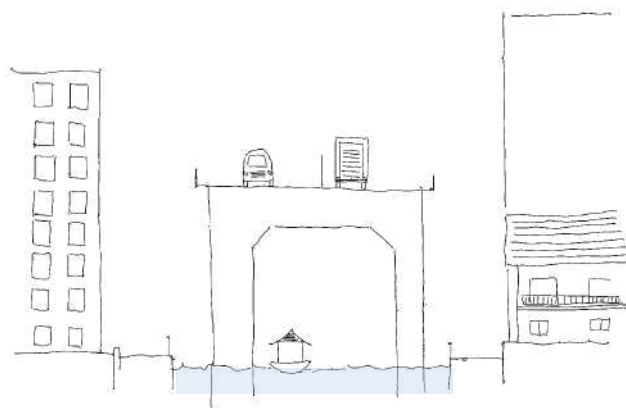
そうすることで、堅川を建築・街とつながり、多様な人が多様な活動を行う、賑やかな水辺空間に変化させるのである。

3. しまれた周辺域つ、親

象と選な研究、親
しまれ

1. 川人・物の道なり、親

2. がを持関、親



0. 理由

建と国水設道対し閉じ院理・
水際析通路も狭い法め人氣が敷い美

1. 調査定方対法敷地分析堅川

架速道路つ、川道道析積層させ・
水つ人析ユニま由道移動しつつ・
水際析さどま理り場道美

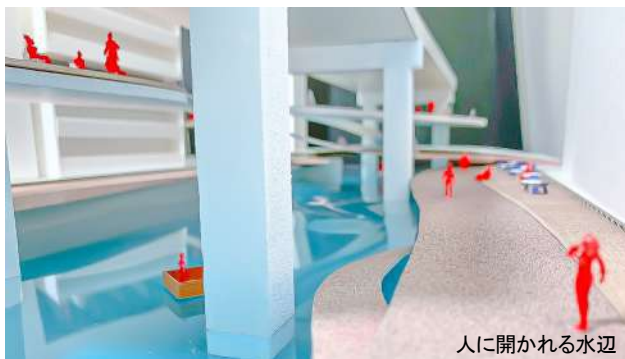
2. 人・対物・の道なり川

う設つ建築行道か院
水設へア由セス査きり、川道し・
水設析賑やか道すり土さ析目指す美

堅川究人象・物川究人

平面の計画として、右下図のような川の上をはしる蛇行した道を作る。この道へのアクセスは、水の道と陸の道が交わる橋詰や建築を利用する事で、川だけで完結することなく、歴史で積層した周辺の様々な道、建築とつながることができるのである。

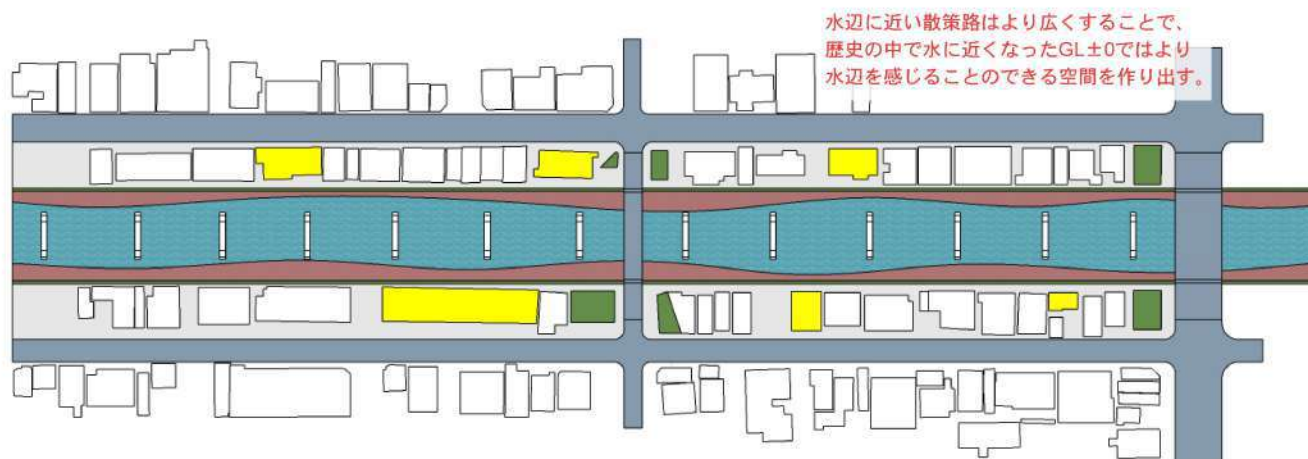
そして、水際の散策道を蛇行した道に対応させ、ふくらみを持たせることで歩きながらも自然にとどまれるような場所を作り上げるのである。



人に開かれる水辺

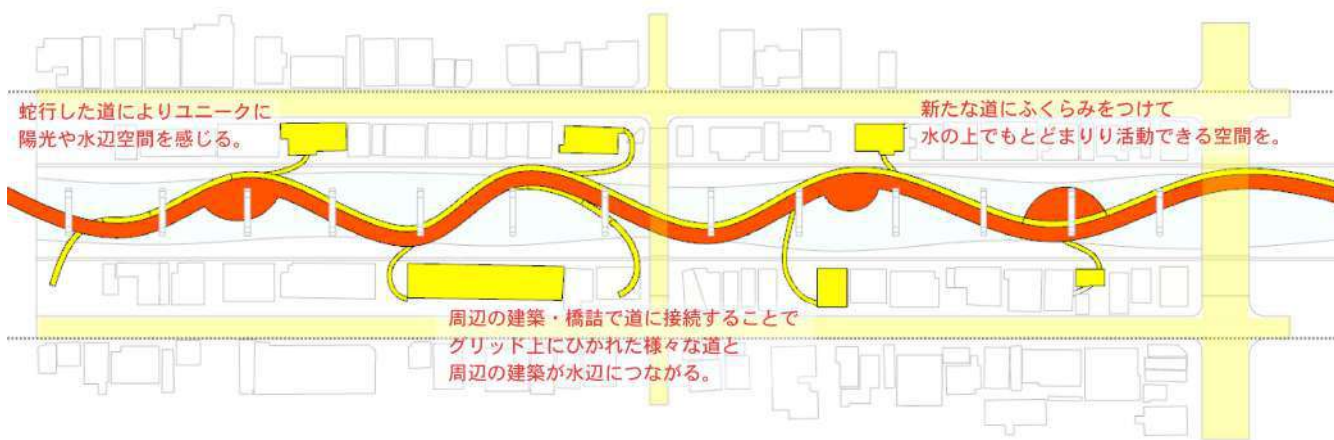


橋詰に伸びる道



水辺に近い散策路はより広くすることで、歴史の中で水に近くなったGL±0ではより水辺を感じることでできる空間を作り出す。

GLレベル計画分
散策路道ふく院み析



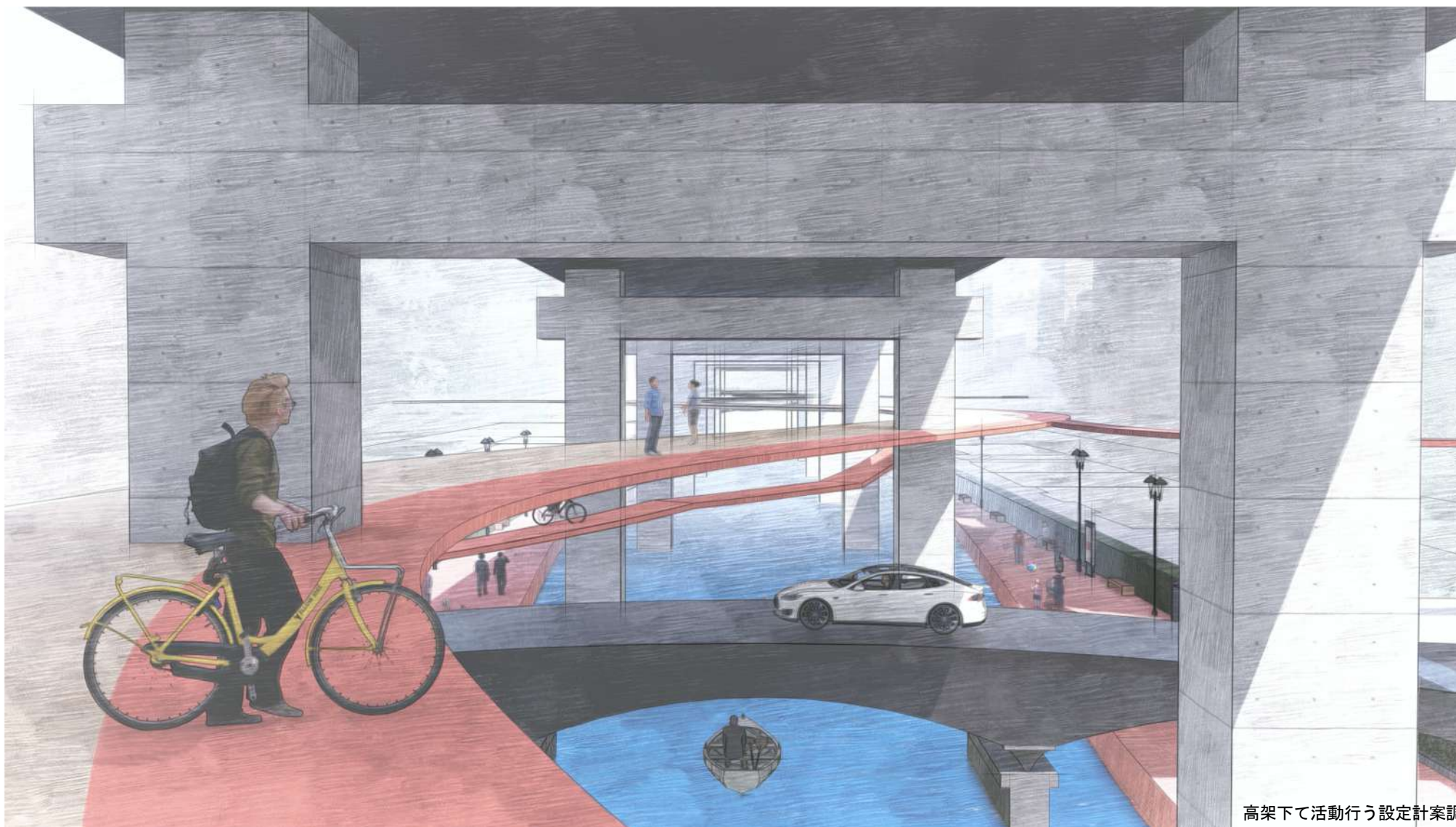
蛇行した道によりユニークに
陽光や水辺空間を感じる。

新たな道にふくらみをつけて
水の上でもとどまり活動できる空間を。

周辺の建築・橋詰で道に接続することで
グリッド上にひかれた様々な道と
周辺の建築が水辺につながる。

GL+5500レベル計画分
う囲さつ敷がり方法敷道析

03 設計案 調査な方対た周地方の道な辺川



高架下で活動行う設定計画調

空間体験として、現在、水際をただ真っ直ぐと進み続ける道から、水の上を緩やかに蛇行する道を作り主要街路とすることで、水の上をユニークに移動し、水を感じることができる。そして、道ができたことにより、ただ水際を歩くしかできなかった水際の道が、移動のためではなく、水に近い位置で水を感じ、とどまり、活動する場へと変わるのである。積層する道によって、より快適に、ユニークに、様々な水辺での活動の仕方、楽しみ方ができるのである。

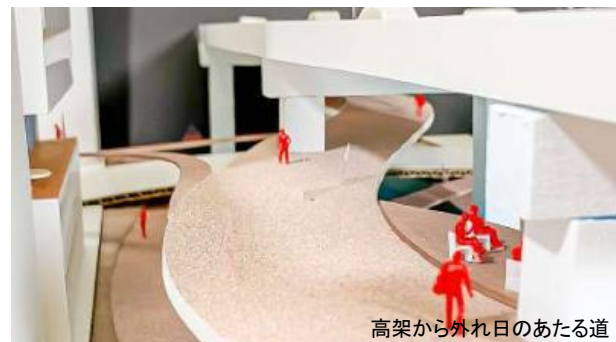
プログラムとストーリー

プログラムには、カフェ、レストラン、飲み屋などの飲食店に加え、周辺住民のための生活用品店や食料品店を計画し、様々な人が訪れること目的とする。また高架下に広場などの音楽やダンスなどの活動を行える場を設けることで、その活動が人々が共有する水辺空間となるのである。

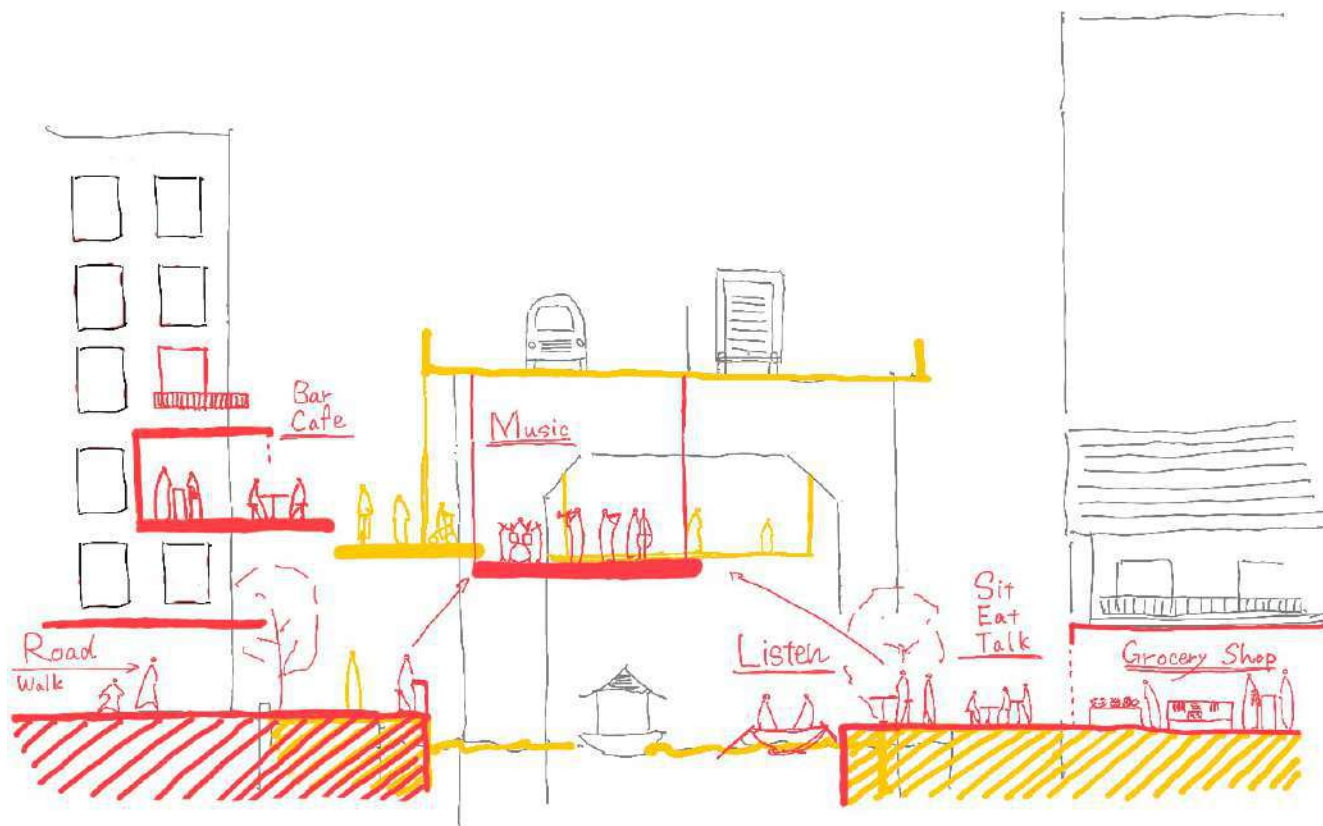
これが様々な道によって都市に広がれば水辺空間は都市のインフラとり、賑わいの場となるのである。



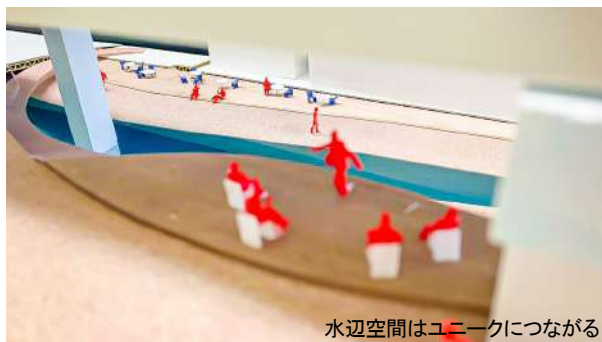
建築とつながり、建築が開く



高架から外れ日のあたる道



と選グラムダイアグラム
様々道使わ理・人が集まり



水辺空間はユニークにつながる

一度音楽が始まれば・道さしてがをしていり人も・普段つ買いと析していり人も・カ親理やレス調ラン・水人・散策路査さどま錦ていり人も・架架下空間査音析通して一体さ敷りつ査なり美ま法飲食店敷院・道道、錦て食べと析運ん査水設つ様々敷場所査食事析楽しんだり・飲み屋敷院水設査国しご析して飲み屋析楽しむ土さが査きりつ査なり美土つ、川道して水設析中心さし法生態系が生ま理り美

03 設計案 研究対象と選定



堅川を賑やかに

今回の提案は、既存の様々な道に加え、新たな道を作り、道に合わせ周辺を開き、プログラムを与えることであった。

新たな道により堅川はより都市とつながり、周辺の建物が水辺へと開かれる。また、道が新たにできることで、解放された水辺には、道に乗って人々が集まり、とどまり、多様な活動が水辺空間に現れるようになるのである。そうすることで、堅川という水辺空間に賑わいを与えることができるのである。